

森林教室の総括

岡崎営林署 東 章

はじめに

我が国の森林林業をとりまく情勢は益々厳しさを増している。

このような状況にてらして、林野庁をはじめ各営林署では、様々な手法を駆使して国民の啓蒙に努力を傾注してきた。各署が精力的に取り組んだ森林教室もそのひとつであろう。

岡崎営林署でも、昭和55年から本格的に森林教室に取り組み今年で10年目を迎えた。

十分の一世紀をふり返り、森林教室の歩みを総括するには恰好の時期と考え、とりまとめたものである。

内 容

1. 森林教室の実績

実施回数 118回

受講者数 6,700人

2. 当署における森林教室の特徴

(1) 室内教育が原則

ひとくちに森林教室といっても、その態様は様々でそれぞれ長所短所をもっている。

例えば、野外教室はレクリエーション的な性格をもち、生きた教材に恵まれ楽しみながら学習できるが、同時に濃密な学習に欠け、季節や天候に左右されるという短所がある。

一方室内教育では、季節や天候に関係なく中身の濃い学習ができるが、遊びの要素がないために、講義の巧拙が問われるという弱点を持っている。

岡崎営林署では、都市近郊林をあずかる環境条件をフルに生かして、一人でも多くの人に森林教育を行うことをモットーに、室内教育を原則として今日まで歩んできた。

(2) 成人対象が原則

当署の森林教室も発足当時は小中学生が主であった。

しかし、森林林業の危機的状況の打開は、今日的な緊急課題であって、早急な国民の理解と協力が必要との判断から、昭和59年度以降は、成人対象の森林教室に切り換えたのである。

(3) 学泉女子短期大学中心の森林教室

県下の女子短期大学六校に対して、森林教室の要請文書を発送した結果、3校から応諾の通知があった。

当署では、その3校について森林教室を実施したうえで、次の理由から学泉大学1校にしぼって、恒常的に森林教室を実施していくことに決定したのである。

理 由

- 学校当局に森林に対する関心が高い。
- 生活科、幼児教育科の存在が好材料。
- 学生数 8,000人に魅力。
- 感性の豊かな学生が多い。
- 若い女性の参加は閉鎖的な環境を活性化する。
- 当署の組織体制から1校が限界

ちなみに、現在までに実施した同校の森林教室は、5年間で30回、受講学生は2,400人に及び、この数字からみると、約1ヶ月に1回はどこかの教室で森林教育を行ったことになる。

3. 森林教室の効果

森林教室を実施したあとでは、必ず感想文を提出することになっているが、それをみる限り一定の成果はあったと確信している。

4. 森林教室で最も大切なこと。

(1) 学習資料の作成

森林教室を実施するにあたっての、重要な作業のひとつに学習資料の作成がある。

林野庁としての統一的な学習教材がないため、当署独自の教材をその都度作成して行ってきたが、作成にあたっては次の点に留意した。

① 基本を森林の効用にすること

森林の効用には経済的効用、国土保全的効用、厚生の効用などがあるが、昨今の国民的ニーズを考慮して、特に厚生の効用にウエイトをかけた教材を作った。

② 年令、人数、場所を考慮した。

受講者の年令によって教材が異なるのは当然だが、人数によってもアクセントをつけることに心がけた。受講者が200人を超えるような場合は、講演会という認識で講師用の虎の巻というべき資料を作った。このような会場では黒板、パネルの類は使用できないので、森林にまつわるドラステックな話題や、艶聞などを盛り込んだ、ユニークな口演用の資料を作って使用した。また、野外では視覚、室内では聴覚教育を基本に学習資料を作成

した。

③ 大学生の学習資料はやや高度に。

学泉大学では森林の効用と、木材の流通機構、材価の変動、林業衰退の社会的背景などに言及した資料を使用した。

④ 学生の反応を資料にいかす。

講義中においては、学生の反応に注意をはらい、学生は何を知りたがっているか、何に関心を示したかを洞察し、それに対応した資料作りに心がけた。

学泉大学では植生の遷移や、フィトンチッドの効用などに関心が集まり、次回からはかなりこの点にウェイトをかけたつもりである。

(2) シャベリのテクニック

森林教室の講師は、学校の教師や、研修などの講師と質的に違うような気がする。

学校の授業や研修では、真摯な気持ちで受講しないと、モロにテストや仕事にはね返ってくるが、森林教室では聞こうが聞かまいが、時の流れに身をまかすていけば、学生のノルマは果たせるのである。

面白くも、おかしくもない森林の話をいかに聞かせるか。私はこの両者の関係を「シャベリ手と聞き手の斗い」と定義してきた。

そして、この関係を決定的に左右するのが、シャベリのテクニックだと確信している。

① 誘導段階での勝負

最初の3分、つまり誘導段階で場内に爆笑を誘うことができれば大成功である。それによって両者間の緊張がほぐれ、話しがぐっとしやすくなるし、次の話しに期待と興味もたせる効果があるからである。この段階での堅い話しは禁物のように思う。小中学生は別としても、成人ならぐっと柔らかい方が効果的である。

私の場合は出身地の網走を引用し、番外地の話しをよく用いた。

② 話題の転換

受講者の集中力は年令に多少の差はあるにしても、地味な森林の話しでは20分程度が限界のように思う。このことは学生の表情や態度によって察知できる。

この場合は、いざぎよく話題を転換することが必要で、私は時事解説や芸能界のゴシップ、はたまた猥談などを適当に挿入しながら集中力の回復をはかった。

このように話しを転換するためには、平素から有効なネタを収集しておくことが大切で、森林に関する話だけではどうあがいてみても、90分から120分の長丁場は凌げないのである。

③ 言葉は易しくゆっくりと

森林教室では、極力専門用語をさげ平易な言葉でしゃべることである。かりに専門用語を用いたときは、必らず解説を忘れないことである。

また、たて続けに延々としゃべられると、聞き手が疲れるばかりか、しゃべり手も方向感覚を失ってしまう。しゃべり方も文章と同じで、一センテンスを短かくして、その間隔を、一拍休止符をうつような気持でしゃべることがコツだと思う。

④ 森林の話しと事件を併用させる。

森林の話しをするときは、身近に発生した事件を併用してしゃべることが有効だと考える。

例えば、水を貯える機能では福岡県の渇水事件を併用し、国土を守る働きでは47年の藤岡村災害との併用説明が、分りやすく飽きさせない方法だと思う。

5. 講師にどの程度の知識が必要か

私は、森林教室の講師に高度な専門的知識は必要ないと考えている。それは、受講者が森林林業を専門としない人達であるからだ。

私自身、工業学校の出身であり、大学二部でも国文科専攻という森林にはまったくのド素人なのである。しかし、結果的には素人であったことが、かえって相手を理解しながら講義ができる利点になったと確信している。

6. 今後の問題点

(1) 森林教室の真の目的はなにか。

私はしばしば「森林の重要性は分ったが、今何をすればよいのか」という質問をうけた。

たしかに木を植え、それを守り育てることは大切だし、森林の大切さを認識してもらうことも必要であろう。だが、それだけで今日森林林業が抱えている問題の解決にはならないと思うのである。

今日の森林林業の衰退は、我が国の高度成長政策による産業構造機構のひずみによって、発生した現象であろう。したがって森林教室は、政治や行政を動かすための強力な世論喚起の手段であってよいのではないか。

その意味では、公務員という制約はあるにしても、いま一步踏み込んだ思想性があってもよいと思う。

森林の重要性を説いていけば、必然的に世論喚起にゆきつくという論法は、森林林業の今日的な危機に即応しない、きわめて消極的な発想だと考える。

(2) 予算の増額

広報関係の予算は、年間13万程度であるが、これは管内概要、機関紙、森林教室などを

含めたもので、情報化時代といわれる今日の社会情勢にてらして、あまりにもお粗末にすぎはしないか。

む す び

森林林業の危機的状況は、それをとりまく環境条件をみる限り、相当長期にわたることを覚悟せねばなるまい。このような状況を考えるとき、国民の理解と協力を求めるための手段として、森林教室の出番は益々増え続けるであろう。

本稿は、私の10年間にわたる森林教室の集大成と考えている。つたない論文ではあるがささやかなりとも参考になれば幸せである。

最後に、森林林業の黎明に夢を託して、森林教室がさらに発展強化され、連綿といきづいていくことを心から祈って止まない。